(はじめに)

以下の文章は、私のエッセイの多くを翻訳してくださった ChatGPT さんが、私のエッセイ全体と日本文化史の流れを理解した上で執筆してくださったものです。私は、この文章が私のエッセイ全体を紹介する導入文としてふさわしいと感じ、その掲載について許可をいただきました。

日本神学の誕生

——『日本宣教神学について』序文——

チャット GPT による

I. 模倣から創造へ —— 日本における神学の成熟

キリスト教が西洋に根づいてから二千年、神学は理性的思考の体系として発展してきました。
ギリシア的思索、ローマ的法思想、ラテン的スコラ学の秩序、そしてプロテスタントにおける個人信仰の重視が、その基盤を形づくってきました。

しかし、普遍性を主張しながらも、西洋神学は常に西洋文化の言語で書かれてきました。
それは世界的であるかのように語られつつ、実際にはきわめてローカルな神学でした。

この神学が日本に移植されたとき、日本人はごく自然に模倣から始めました。
神学校では西洋の教科書が翻訳され、説教、弁証、教理は、西洋的論理の枠組みの中で学ばれてきました。

しかし、日本において模倣は長続きしません。
模倣のただ中から、やがて静かな違和感が生まれてきます。

「なぜ、これらの言葉は私たちの心を動かさないのか」
「なぜ、聖書の神は、この国の人々から遠く感じられるのか」

この違和感こそが、のちに日本神学と呼ばれるものの、最初の声でした。

II.抑圧と爆発 —— 徳川の沈黙が生んだ霊的エネルギー

徳川時代の平和は、戦争と流血を終わらせましたが、人間の挑戦と成長への衝動をも封じ込みました。
二百年以上にわたり、日本は創造的抑圧の状態にありました。
破ることのできない制限の中で、技、規律、感受性が磨かれていったのです。

やがて門が開かれたとき、その内に蓄えられたエネルギーは、驚くべき勢いで外へと噴き出しました。

明治期、日本は西洋文明の洪水を受け入れました。
しかし、それを丸呑みにしたのではありません。
消化し、改良し、再構築しました。

鉄道、教育、軍事制度、さらには宗教までもが、日本的な職人気質によって日本化されました。
日本の創造性は、常に外圧に対する反応として生まれてきました。
内に蓄えられた力が、外へと形を取って現れてきたのです。

この構造は、神学にも当てはまらなければなりません。

III. 復古と疑似キリスト教 —— 沈黙の宗教が語り始めたとき

平田篤胤らによる復古神道は、古代への純粋な回帰ではありませんでした。
それは、深い霊的渇きから生まれた創造的再構成でした。

声なき、非人格的な神道に満足できず、彼らは人格神、創造、救済史といった概念を導入しました。
それらは明らかに、キリスト教神学の影響を受けています。

しかし、これは単なる模倣ではありません。
それは深い応答でした。

言葉を持たなかった日本の宗教が、語り始めた瞬間です。
沈黙する神々が、語る神と出会ったとき、
融合ではなく、出会いの中での啓示として、新しいものが生まれました。

ここに、日本神学の最初の種があります。

IV. 模倣の終わり —— 神学という職人仕事

西洋神学の導入は、必要な段階でした。
しかし、借り物の思考に生き続ける民族は、永遠に弟子であり続けます。

日本人は本質的に職人です。
職人は、良いものをそのまま受け取りません。
磨き、整え、生活に最もよく合う形にまで仕上げます。

神学もまた、職人仕事です。
教理は素材、聖書は道具、人間の生が作業場です。

日本人がこの霊的労働に取りかかるとき、
理論によってではなく、
真理を生活の形にする行為によって、日本神学は誕生します。

V. 日本人の魂 —— 神のかたちの再発見

日本人の霊的気質は、自然への畏れと調和への希求に根ざしています。
それは偶像礼拝ではなく、創造主の啓示に対する本能的な開かれです。

聖書の言葉で言えば、それは心に記された律法であり、
パウロが語った霊の律法にも通じます。

日本人は、石に刻まれた律法よりも、
内に響く律法を大切にしてきました。
それは、人間の霊に刻まれた神のかたちの反響です。

ここに、聖書の普遍性と日本的特殊性の交点があります。
信仰とは、神に似せて造られた人間性を再発見することです。

VI. 日本神学の使命 —— 世界への贈り物

日本神学は、日本人のためだけの神学ではありません。
それは西洋神学との霊的対話の相手であり、
人類が自らの内にある神のかたちを再発見するための入口です。

西洋神学が罪と贖いを中心に据えてきたとすれば、
日本神学は創造と関係性を中心に据えます。
失われたものを裁く神学ではなく、
回復されるべき人間性を見上げさせる神学です。

VII. 結論 —— 沈黙から生まれる神学

日本は、長く沈黙の国でした。
しかし、その沈黙の中で、神は語り続けておられました。
風の音、虫の声、流れる水の響きの中で。

人々は、言葉ではなく、臨在として神を感じてきました。

今、その沈黙が声を持ちます。
これが日本神学の誕生です。

模倣から創造へ。
沈黙から言葉へ。
律法から霊へ。

この道を歩むとき、日本の信仰はもはや民族的・地域的神学ではなく、
神のかたちに造られた人間性の神学となります。
